

聖書ギリシア語とゴート語の 対照研究に関する一考察

鴨 瀬 昌 幸

0

本稿では、聖書ギリシア語（以下、単にギリシア語と記す）とゴート語の対照研究を始めるにあたって、研究に用いる両言語のテキストについて考察する。なお、ゴート語はローマ字転写で表記する。転写の方式は、慣習に従う。

1

これまで、ゴート語と聖書ギリシア語（コイネー）の対照研究においては、主にゴート語の性格についての議論が重ねられてきた。つまり、これまでに発見されているゴート語の資料の大部分はギリシア語からの新約聖書の翻訳であるが、それらがギリシア語聖書の単なる直訳であるのか、それともゴート語あるいはGermanischの性質がよく表われている「意訳」であるのか、という問題である。だが、このゴート語訳聖書で用いられたゴート語の可能性をもう少し深く検討してみると、少なくとも次の四通りが考えられる。

1. 翻訳者、あるいは当時のゴート人の口語を反映したものであって、当時のゴート人の間に確立されていた文語の類ではない。
2. 当時のゴート人の間に確立されていた文語であって、直接ギリシア語の影響を受けていない。
3. ギリシア語に影響されているものの、ゴート語あるいはGermanischの性質がよく表われている文語。
4. ギリシア語の影響を強く受けているか、あるいは単にギリシア語の直訳。

聖書学、あるいは聖書ギリシア語の研究者にとっては、ゴート語・アルメニア語・古代教会スラブ語等、他言語に翻訳された聖書や他の文献資料は、多くの場合二次的な価値しか持たない。だが、ゴート語や古代教会スラブ語などを研究する場合には、研究対象となる言語と共に、翻訳の底本において用いられた言語であるギリシア語を

も考察しない訳にはいかない。ここで、筆者の（そして、恐らくは他の多くの研究者の）ゴート語を研究する目的は、ゴート語の性格を明らかにすることである。そのためには、ギリシア語とゴート語を、シンタックスに関して細かく対照研究を行なう必要がある。だが、対照研究を行なうためには、まず研究に用いるテキストを決定しなければならない。そこで、以下では、まず対照研究にあたって両言語のテキストについて考察を行なう。

2

どの学問分野であれ、文献を扱う研究の際には、Textkritikについての問題がつきまとう。ギリシア語とゴート語の対照研究をする場合には、まず第一に、ギリシア語聖書をゴート語に翻訳した Wulfilaが、翻訳の際に底本としてどのテキストを用いたかが問題になる。だが、今の所、この問題に関する直接的な資料が発見されていないので、彼が用いた底本としてのテキストを特定することは不可能である。そこで、次善の策としてゴート語の研究者が参照してきたギリシア語のテキストは、主に次の二種類であるように思われる。

1. 既存の印刷刊本

2. StreitbergがDie Gotische Bibelで提供したテキスト¹⁾

だが、この既存の印刷刊本について、経沼寿雄氏は次のように述べている²⁾。

「通常、ギリシア語新約本文として用いられている印刷本文は、(a)種々の写本の本文から、(b)種々の既刊の刊本の本文から、(c)四種類の本文型³⁾から、取捨選択したいわゆる「折衷本文」(eclectic text)である。すなわち、本文学による操作を経て出来上がったものである。従って、現在、ギリシア語新約本文として、ネストレ版とか、連合聖書教会版とか、印刷刊本が用いられるが、これらも相互に相違し、また、版(すなわち、第何版)によっても相違し、同一のものはない。すなわち、刊本にも本文が全く同じものはないのである。」

ここで、印刷刊本(及び、それに類するもの)によって本文が異なる例を、酒井良夫氏が挙げている例⁴⁾と重ならないように注意しながら、手持ちの刊本類から2例ほど挙げておく。

οὐ δὲ ὕταν προσεύχῃ, εἴσελθε εἰς τὸ ταμεῖόν σου καὶ κλείσας τὴν θύραν σου πρόσευξαι τῷ πατρὶ σου τῷ ἐν τῷ κρυπτῷ· καὶ ὁ πατήρ σου ὁ βλέπων ἐν τῷ κρυπτῷ ἀποδώσει σοι.

---Matth. 6, 6

(あなたは祈るとき、自分の部屋に入り、戸を閉じて、隠れたところにおいてあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであらう。)

この例文は、Nestle-Alland版のものであるが、下記に示すStreitberg が提供したテキストでは、文末に追加がある。

σὺ δὲ ὅταν προσεύχῃ, εἴσελθε εἰς τὸ ταμιεῖόν σου καὶ κλείσας τὴν θύραν σου πρόσευξαι τῷ πατρὶ σου τῷ ἐν τῷ κρυπτῷ, καὶ ὁ πατήρ σου ὁ βλέπων ἐν τῷ κρυπτῷ ἀποδώσει σοι ἐν τῷ φανερῷ.

次の例を見てみよう。今度は、Nestle-Alland版のテキスト(上)とStreitberg が提供したテキスト(下)を並べて比較すると：

Ἐγένετο ἐν ταῖς ἡμέραις Ἡρώδου βασιλέως, τῆς Ιουδαίας ἱερεὺς τις ὀνόματι Ζαχαρίας ἐξ ἑφημερίας Ἀβιά, καὶ γυνὴ αὐτῷ ἐκ τῶν θυγατέρων Ἰαρώων καὶ τὸ ὄνομα αὐτῆς Ἐλισάβετ.
--Luk. 1,5

Ἐγένετο ἐν ταῖς ἡμέραις Ἡρώδου τοῦ βασιλέως τῆς Ιουδαίας ἱερεὺς τις ὀνόματι Ζαχαρίας ἐξ ἑφημερίας Ἀβιά, καὶ ἡ γυνὴ αὐτοῦ ἐκ τῶν θυγατέρων Ἰαρώων, καὶ τὸ ὄνομα αὐτῆς Ἐλισάβετ.

(ユダヤの王ヘロデの世に、アビヤの組の祭司で名をザカリヤという者がいた。その妻はアロン家の娘のひとりで、名をエリザベツといった。)

Nestle-Alland版のテキストに対し、Streitberg が提供したテキストでは、定冠詞が付加されている箇所があり、下線部の語の格が異なっている事がわかる。

なお、筆者が上記で挙げた例は、別に聖書全体を目を皿のようにして捜し出した訳ではなくて、任意に開いたページから抜き出したものである。ここに挙げた他にも、多くの例がある。つまり、神学の研究ならともかく、こと言語に関する研究をする場合、現代の刊本を鵜呑みにする訳にはいかない(勿論、参考のために参照するのは一向に構わないであろう)。やはり、最終的には翻訳された当時の写本を比較検討する必要がある。

さて、Wulfila がギリシア語聖書をゴート語に翻訳したのは四世紀の半ば頃だとされているが、そのころのギリシア語聖書の状態は次の通りであって、まだ統一的な聖書本文が生み出されていなかったことが分かる⁵⁾。

「われわれの言いうるすべては、次の通りである。すなわち、四世紀から八世紀ごろまでのこういう過程(=本文正典化の校訂：引用者)を経て、その結果標準的な本文が生み出され、われわれに伝わっている写本の大部分に見られるのがそれである、と。」

今までに発見されている写本は、新約の福音書に限っても2083ほどある⁶⁾。ただ、写本が2083あるといっても、それらはいくつかの型に分けることができるであろうことは、写本が用いられた目的—宗教的活動—を考慮すれば、容易に推測可能である。では、どのくらいの本文の種類、つまり本文型があったのであろうか。この問題について、前出の姪沼氏は次のように述べている⁷⁾。

「新約本文は伝承の過程において、所と時とにより、大体四種類の本文型 (text-type) に分類される。すなわち、「西方」(Western)、「アレクサンドリア」(Alexandrian)、「カイサリア」(Caesarean)、「ビュザンティオン」(Byzantine)である。すなわち、それぞれの地方、それぞれの時期においては、大体これらの本文型が聖書本文であり、正典であったのであって、相互に異なっている。しかも、写本により、これらの本文型が混合しているものもあり、本文の状態は複雑であった。」

ここで考慮されねばならないことは、Wulfila が属していたのはKonstantinopel司教区であったという事実である。そこで、その司教区で主に用いられていたテキストが翻訳に際しての底本になったという予想をたてることは十分に可能である⁹⁾。とすれば、Konstantinopel司教区で主に用いられていたテキストが、どの本文型に属するかが分かれば、その本文型を持つ写本を重点的に検討すればよいことになる。

ただ、今回、筆者はKonstantinopel司教区でどの本文型が支配的であったかを調査することができなかったし、写本の主なものだけでさえも比較検討する余裕が無かったことを白状しなければならない。これらの作業は、今後進めていくつもりである。なお、上記のNestle-Aland版聖書、すなわち Nestle-Aland: Greek-English New Testament, 26th rev. ed. 及び Streitberg, W.: Die Gotische Bibel. 6. Aufl. の双方に、代表的な写本の異同が載っているため、それらにも当然留意する。

なお、ここでイギリスの語源学者であるFriedrichsenの言葉を、酒井氏の訳によって引用する⁹⁾。

「StreitbergはWulfila が翻訳の際に使用したテキストを我々に提給しなかったことは云う迄もない。ゴート語の4福音書について我々の知っていることが、唯一の原稿に限られている限りは、ギリシャ語の原本を復元することはできないだろう。しかしStreitbergは一種のテキストを我々に提給した。これはゴート語福音書の翻訳者又は翻訳者たちの以前に存在したに違いない原文と殆ど相違していないので、私はこれに私の仕事の基礎をおくことに満足しており、私の結論の正確さはそれほど影響をうけないことを確信している。」

今だ未熟ではあるが、学問の道を志す(そして、非キリスト者である)筆者としては、上記から窺える彼の態度は余りにも無邪気すぎる、あるいは諦めがよすぎると思わざるを得ない¹⁰⁾。

3

次に、ゴート語のテキストについて考察を加えてみたい。
まず、いままで発見された写本は、数が多くない上に、聖書全体に及んでいない。従

って、ゴート語訳の現存する箇所しか狭い意味での対照研究は行い得ないことになる。

また、上記でギリシア語聖書のテキストに関する問題について述べたが、ゴート語訳の方についても、写本が複数伝わっている部分についてはTextkritikが問題になる。事実、二つの写本が残っている場合、表記法の違いなどが分かる場合がある。

ここに、その例を示す。下線部に注意されたい：

ni swaswe frauinonds qitha izwis, ak in thizos antharaize usdaudeins
jah izwaraizos frijathwos airknitha kiusands. ---2. Kor. 8.8

ni swaswe frauinonds qitha izwis, ak in thizos antharaize usdaudeins
jah izwaraizos friathwos airknitha kiusands.

(こう言っても、わたしは命令するのではない。ただ、他の人たちの熱情によって、あなたがたの愛の純真さをためそうとするのである。)

もう一例ほど見てみよう。

jaththe bi Teitu, saei ist gaman mein jaggawaurstwa in izwis: jaththe
brothrus unsarai apaustauleis aikklesjono, wulthaus Xristaus.

---2. Kor. 8.23

jaththe bi Teitu, saei ist gaman mein jah gawaurstwa in izwis: jaththe
brothrus unsarai apaustauleis aikklesjono, wulthus Xristaus.

(テトスについて言えば、彼はわたしの仲間であり、あなたがたに対するわたしの協力者である。この兄弟たちについて言えば、彼らは諸教会の使者、キリストの栄光である。)

従って、対照研究の際は、ゴート語に関しては全ての写本を考慮に入れねばならないであろう。

ただ、ギリシア語には聖書の写本のほかにも莫大な量の宗教関係文献があり、ゴート語にもカレンダーや聖書の注解書の断片等、ギリシア語の翻訳ではない資料が若干残っているが、これらはいずれも対照研究としては、直接利用しないことにする。又、ゴート語訳の聖書にはパウロの書簡の部分のうち、各手紙の最後の部分が現存しているものには若干行ほど(各手紙及びゴート語の各写本によって異なる)語句が加えられているが、これらも対照研究の範囲からは外れることになる。

4

ここで、上記の事項を踏まえた上で、直接対照研究ができる部分を列挙しておこう。但し、下記で例えば「5:15途中-48」とあった場合には、「第5章の15節の途中から48節まで」、また「8-9全部」とあった場合には、「第8章から第9章まで全部」ということを表す。

1. 新約聖書

a. 四福音書

マタイ

5:15途中-48; 6:1-32途中; 7:12途中-29; 8-9全部; 10:1途中, 23途中-42;
11:1-25途中; 25:38-46; 26:1-3途中, 65-75; 27:1-19途中, 42途中-66途中

ヨハネ

5:45途中-47; 6-7全部; 8:12-59; 9-10全部; 11:1-47途中; 12:1途中-49途中;
13:11途中-38; 14-18全部; 19:1-13途中

ルカ

1-9全部; 10:1-30途中; 14:9途中-35; 15全部; 16:1-24途中; 17:3途中-37;
18-19全部; 20:1-46途中

マルコ

1-5全部; 6:1-30途中, 53途中-56; 7-11全部; 12:1-38途中; 13:16途中-29途中;
14:4途中-16途中, 41途中-72; 15全部; 16:1-12途中

b. パウロ書簡

ローマ

6:23; 7全部; 8:1-10途中, 34途中-39; 9-10全部; 11:1途中, 11途中-36; 12:
1-5途中, 8途中-21; 13全部; 14:1-5途中, 9途中-20途中; 15:3途中-13途中;
16:21途中-24

コリント第1

1:12途中-25途中; 4:2途中-12途中; 5:3途中-13; 6:1途中; 7:5途中-28途中;
8:9途中-13; 9:1-9途中, 19途中-27; 10:1-4途中, 15途中-33; 11:1-6途中,
21途中-31途中; 12:10途中-22途中; 13:1途中-12途中; 14:20途中-27途中;
15:1-35途中, 46途中-58; 16全部

コリント第2

1-13全部

エペソ

1-4全部; 5:1-10途中, 17-29途中; 6:8途中, 9-24

ガラテヤ

1:1-7途中, 20-24; 2全部; 3:1-6途中, 27-29; 4-6全部

ピリピ

1:14途中-30; 2:1-8途中, 22途中-30; 3全部; 4:1-17途中

コロサイ

1:6途中-29; 2:11途中-23; 3-4全部

テサロニケ第1

2:10途中-20; 3-5全部

テサロニケ第2

1全部; 2:1-4途中, 15-17; 3全部

テモテ第1

1-4全部; 5:1-14途中, 16の一部分, 17途中-25; 6:1-16途中

テモテ第2

1-3全部; 4:1-16途中

テトス

1全部; 2:1途中

ピレモン

11途中-23途中

2. 旧約聖書

ネヘミア

5:13途中-18途中; 6:14途中-19; 7:1-3途中, 13途中-45途中

5

上記の中で、四福音書の順序が、現在一般的に行なわれているものと異なっているのが目につく。これは、StreitbergのDie Gotische Bibelの排列によったものである。ところで、そのDie Gotische Bibelの四福音書の順序は、ゴート語の四福音書を含む唯一の写本であるcodex argenteusの順序を踏襲したものである¹¹⁾。

さて、福音書の順序についてであるが、現在の慣用になっているマタイ-マルコ-ルカ-ヨハネという順序は、いわゆる東方型の排列である。そして、ゴート語聖書で用いられている排列、すなわちマタイ-ヨハネ-ルカ-マルコという順序はいわゆる西方型である。この西方型の排列を持つギリシア語聖書の写本としては、ベザ写本、ワシントン写本等がある¹²⁾。

ここで再び考慮しなければならないのが、Wulfilaの属していた司教区についてである。既述の通り、彼はKonstantinopel司教区で布教活動をしていたことが分かっている。ここで、Konstantinopelは(その位置から言っても)東方教会に属している。ところが、今見たように、ゴート語訳聖書の福音書の順序は西方型の排列になっている。ということは、上述したような、翻訳者は彼の、つまりKonstantinopelの司教区で一般的に用いられてきたテキストを基礎にして訳をすすめたというStreitbergの説は、少し怪しくなるとは言わないまでも、そのまま信じる訳にはいかないように思える。

註

1. Streitberg, W.: Die Gotische Bibel. Sechste, unveränderte Auflage, 1971では、聖書本文の部分が見開きになっていて、右側にはゴート語の、左側にはギリシア語のテキストが対照されて載っている。
2. 蛭沼寿雄:『新約正典のプロセス』1972, 158頁。
3. 本文型については、すぐ後で言及する。
4. 酒井良夫:「ゴート語におけるabsolute Dativの成立について。」『言語研究』95, 77-93, 1989.の中に挙げられている。
5. F.ケニヨン(山本七平訳):『聖書の生いたち』増補・改訂版, 1983, 46頁。
6. 蛭沼寿雄:『新約正典のプロセス』1972, 157頁。
7. 上掲書, 148頁。
8. Streitberg, W.: Die gotische Bibel. Sechste, unveränderte Auflage, 1971. s. XXXIを参照。
9. Friedrichsen: The gothic version of the Gospels; A study of its style & textual history, 1926. より。酒井良夫:「ゴート語におけるabsolute Dativの成立について。」『言語研究』95, 1989の77頁で引用されている。
10. また、次の文章(R.プロット/G.ローフィンク:『今こそ聖書がわかった』1977, 58頁を参照されたい。

「…(前略:引用者) これら数多くの異なる写本を比べてみると、原文がいかにか忠実に伝えられているかがわかる。だから、今日私たちが手にしている聖書の内容には、大きな信頼がおけるのである。…(後略:引用者)」

まさに、聖書の内容には大きな信頼がおける。だが、例えば研究対象として語順を取り扱う場合、後に示すようにテキスト間で異同があるのを知らないで、あるいは無視して研究を進めることは避けねばならない、と筆者は考える。
11. Streitberg, W.: Die Gotische Bibel. Sechste, unveränderte Auflage, 1971. s. XXV.
12. 蛭沼寿雄:『新約正典のプロセス』1972, 150-151頁。

参考文献

- Braune, W.: Gotische Grammatik. 16. Auflage, neu bearbeitet von E. A. Ebbinghaus. Tübingen: Max Niemeyer, 1961.
- Eda Yoko: A Study of Gothic Absolute Constructions -- As Compared with Those in the Greek Original -- . 『言語研究』93, 39-60, 1988.
- Hirunuma Toshio [蛭沼寿雄]: 『新約正典のプロセス』東京: 山本書店, 1972.

- Kanda Tateo [神田盾夫]: 『新約聖書ギリシア語入門』東京: 岩波書店, 1964⁵.
- Kenyon, F.: The Story of the Bible. 邦訳: F. ケニヨン (山本七平訳): 『聖書の生
いたち』増補・改訂版, 東京: 山本書店, 1983.
- Konkordanz zum Novum Testamentum Graece von Nestle-Aland, 26. Auflage, und
zum Greek New Testament, 3rd Edition. Berlin-New York: de Gruyter, 1987.
- Meillet, A.: Introduction a l'étude comparative des langues indo-européennes.
Paris, Hachette, 1937⁸.
- : Caractères généraux des langues germaniques, septième édition
revue. Paris: Hachette, 1949.
- Mossé, F.: Manuel de la langue gotique. Paris: Aubier, 1942.
- Nestle-Aland: Greek-English New Testament, 26th revised edition. Stuttgart:
Deutsche Bibelgesellschaft, 1979.
- R. プロット/G. ローフィンク: 『今こそ聖書がわかった』東京: 女子パウロ会, 1977.
- Sakai Yoshio [酒井良夫]: 「ゴート語における absolute Dativ の成立について。」
『言語研究』95, 77-93, 1989.
- Streitberg, W.: Die Gotische Bibel. Sechste, unveränderte Auflage.
Heidelberg: Carl Winter, 1971.

Abstract. The purpose for this paper is to state that paying special attention to the texts of both Biblical Greek and Gothic is needed for the study of both languages. A full detail of a contrastive studies of both languages on syntax is needed to make the Gothic character clear. As for the Greek texts, the most important codices are those of including the text-type used predominantly in the episcopal ward of Constantinople. As for the Gothic texts, all codices must be taken into account. And the complete list of parts for the contrastive study of both languages are shown.